

笹川記念保健協力財団 奨学金支援

助成番号：2016B1-002

(西暦)

2017年 3月 14日

公益財団法人 笹川記念保健協力財団

理事長 喜多悦子 殿

2016年度奨学金支援

完了報告書

標記について、下記の通り完了報告書を添付し提出いたします。

記

所属機関・職名 _____ 千葉大学院看護学研究科 _____

氏名 _____ 萩谷 翔太 _____

完了報告書

2016年度は主に卒業研究、修士論文の作成を実施した。以下に修士論文の要旨を示し、論文は別に送付する。

論文題目：終末期がん患者の苦痛の認識と緩和要因

(Cognition and Palliative factors of cancer patients at the end of life)

内容：

1. 研究の目的

本研究の目的は終末期がん患者の主観的な全人的な苦痛の認識と苦痛緩和要因を明らかにし、終末期がん患者が苦痛緩和を図ることで、残された時間をその人らしく生ききるために必要な看護支援を検討することである。

2. 研究方法

終末期にあるがん患者 6 名を対象に、記録調査、半構造化面接、参加観察を実施した。苦痛は主観的なものであり、終末期がん患者の内面をありのまま捉えるために、得られたデータは現象学的手法を用いて、終末期がん患者の 1) 苦痛、2) 苦痛の認識、3) 苦痛緩和要因ごとに、質的帰納的に分析した。

3. 研究結果

分析の結果、終末期がん患者の 1) 苦痛：【病状の悪化による生活の支配と生きがいの略取】【本望ではない場で過ごす最期までの時間】など 6 つのテーマ、2) 苦痛の認識：【限られた時間の中での自分らしい生き方と意向の明確化】【自分らしさの変容と自己の無価値化】など 5 つのテーマ、3) 緩和要因：【病気から離れることのできる楽しく過ごす時間】【残存する力を十分に発揮するための暮らしの創造】など 6 つのテーマが明らかとなった。

4. 考察

結果から終末期がん患者の苦痛、苦痛の認識、苦痛の緩和要因の本質を考察した。終末期がん患者の苦痛の本質は、《制限される生活、時間、希望》など 3 つの本質があると考えた。終末期がん患者の苦痛の認識の本質は、《苦痛がもたらす自分らしさの変容と内面への気づき》など 3 つの本質があると考えた。終末期がん患者の苦痛緩和要因の本質は、《時間と暮らしの創造》など 4 つの本質があると考えた。

以上から、終末期がん患者が残された時間を自分らしく生ききるために特に重要な看護支援は、身体的苦痛の緩和を基盤としながら、1) 限られた時間の中にがんから離れることのできる時間を創造する看護支援、2) 終末期がん患者自らが残された力を発揮できる暮らしを創造する看護支援、3) 未来を生きるための希望を創造する看護支援、4) 病か

ら離れ生きる価値や楽しみを見出し健康を支えるための看護支援と考えた。